二人の兄弟

島崎藤村

一　榎木の實

皆さんは榎木の實を拾つたことがありますか。あの實の落ちて居る木の下へ行つたことがありますか。あの香ばしい木の實を集めたり食べたりして遊んだことがありますか。

そろ〳〵あの榎木の實が落ちる時分でした。二人の兄弟はそれを拾ふのを樂みにして、まだあの實が青くて食べられない時分から、早く紅くなれ早く紅くなれと言つて待つて居ました。

二人の兄弟の家には奉公して働いて居る正直な好いお爺さんがありました。このお爺さんは山へも木を伐りに行くし畠へも野菜をつくりに行つて、何でもよく知つて居ました。

このお爺さんが兄弟の子供に申しました。

『まだ榎木の實は澁くて食べられません。もう少しお待ちなさい。』とさう申しました。

弟は氣の短い子供で、榎木の實の紅くなるのが待つて居られませんでした。お爺さんが止めるのも聞かずに、馳出して行きました。この子供が木の實を拾ひに行きますと、高い枝の上に居た一羽の櫪鳥が大きな聲を出しまして、

『早過ぎた。早過ぎた。』と鳴きました。

氣の短い弟は、枝に生つて居るのを打ち落すつもりで、石ころや棒を拾つては投げつけました。その度に、榎木の實が葉と一緒になつて、バラ〳〵バラバラ落ちて來ましたが、どれもこれも、まだ青くて食べられないのばかりでした。

そのうちに今度は兄の子供が出掛けて行きました。兄は弟と違つて氣長な子供でしたから『大丈夫、榎木の實はもう紅くなつて居る。』と安心して、ゆつくり構へて出掛けて行きました。兄の子供が木の實を拾ひに行きますと、高い枝の上に居た櫪鳥がまた大きな聲を出しまして、

『遲過ぎた。遲過ぎた。』と鳴きました。

氣長な兄は、しきりと木の下を探し廻りましたが、紅い榎木の實は一つも見つかりませんでした。この子供がゆつくり出掛けて行くうちに、木の下に落ちて居たのを皆な他の子供に拾はれてしまひました。

二人の兄弟がこの話をお爺さんにしましたら、お爺さんがさう申しました。

『一人はあんまり早過ぎたし、一人はあんまり遲過ぎました。丁度好い時を知らなければ、好い榎木の實は拾はれません。私がその丁度好い時を敎へてあげます。』と申しました。

ある朝、お爺さんが二人の子供に『さあ、早く拾ひにお出なさい、丁度好い時が來ました。』と敎へま

した。その朝は風が吹いて、榎木の枝が搖れるやうな日でした。二人の兄弟が急いで木の下へ行きますと、櫪鳥が高い枝の上からそれを見て居まして、

『丁度好い。丁度好い。』と鳴きました。

榎木の下には、紅い小さな球のやうな實が、そこにも、こゝにも、一ぱい落ちこぼれて居ました。二人の兄弟は木の周圍を廻つて、拾つても、拾つても、拾ひきれないほど、それを集めて樂みました。

櫪鳥は首を傾げて、このありさまを見て居ましたが、

『なんとこの榎木の下には好い實が落ちて居ませう澤山お拾ひなさい。序に、私も一つ御褒美を出しますから、それも拾つて行つて下さい。』と言ひながら青い斑の入つた小さな羽を高い枝の上から落してよこしました。

二人の兄弟は榎木の實ばかりでなく、櫪鳥の美しい羽を拾ひ、おまけにその大きな榎木の下で、『丁度好い時』までも覺えて歸つて來ました。

二　釣りの話

ある日、お爺さんは二人の兄弟に釣りの道具を造つて呉れると言ひました。

いかにお爺さんでも釣りの道具は、むづかしからう、と二人の子供がさう思つて見て居ました。この兄弟の家の周圍には釣竿一本賣る店がありませんでしたから。

お爺さんは何處からか釣針を探して來ました。それから細い竹を切つて來まして、それで二本の釣竿を造りました。

『針と竿が出來ました。今度は糸の番です。』とお爺さんは言つて、栗の木に住む栗蟲から糸を取りました。丁度お蠶さまのやうに、その栗蟲からも白い糸が取れるのです。お爺さんは栗蟲から取れた糸を酢に浸けまして、それを長く引延しました。その糸が日に乾いて堅くなる頃には、兄弟の子供の力で引いても切れないほど丈夫で立派なものが出來上りました。

『さあ、釣りの道具が揃ひました。』と言つて兄弟に呉れました。

二人の子供はお爺さんが造つた釣竿を手に提げまして、大喜びで小川の方へ出掛けて行きました。小川の岸には胡桃の木の生えて居る場所がありました。兄弟は鰍の居さうな石の間を見立てまして、胡桃の木のかげに腰を掛けて釣りました。

半日ばかり、この二人の子供が小川の岸で遊んで家の方へ歸つて行きますと、丁度お爺さんも木を一ぱい背負つて山の方から歸つて來たところでした。

『釣れましたか。』とお爺さんが聞きますと、兄弟の子供はがつかりしたやうに首を振りました。賢いお魚は一匹も二人の釣針に掛りませんでした。

その時、兄弟の子供はお爺さんに釣りの話をしました。兄はゆつくり構へて釣つて居たものですから釣針にさした餌は皆な鰍に食られてしまひました。弟はまたお魚の釣れるのが待遠しくて、ほんとに釣れるまで待つて居られませんでした。つい水の中を搔廻すと、鰍は皆な驚いて石の下へ隱れてしまひました。

お爺さんは子供の釣りの話を聞いて、正直な人の好ささうな聲で笑ひました。そして二人の兄弟にかう申しました。

『一人はあんまり氣が長過ぎたし、また、一人はあんまり氣が短過ぎました。釣りの道具ばかりでお魚は釣れません。』